【猿沢池の柳のこと】

朝日新聞の２０１３年３月１３日の新聞に「猿沢池のヤナギ謎の枯れ死」という大見出しの記事があったそうです。新聞記事によると猿沢池のシダレヤナギが枯れ始めたのは１０年ほど前（２００３年頃）からで、３０本が３分の１に激減したという。

１９６０年頃

衣掛柳　２００９年頃に枯渇伐採

枯れる原因調査

２０１２年、猿沢池に植栽されたシダレヤナギが、植栽後５～６年で枯死している。１９６５年から現在に至るまでの約５０年間、植え替えを行ったシダレヤナギは、合計９９本と膨大な量で、新植しても、一定の期間が過ぎると樹勢不良となり、原因不明の枯損に至っている。これらのシダレヤナギの枯損原因を特定するため、奈良県奈良公園室と奈良公園管理事務所が精密調査を行うことになった。

２０１３年５月２９日に枯死木調査を実施し、その結果二箇所の枯死木から採取された菌が「ナラタケモドキ」と同定されたとのことです。これまで、何度も枯死を繰り返していること、枯死に至るまでの症状が「ならたけもどき病」の症状であること、公園内の他の場所のシダレヤナギが健全であること等から、シダレヤナギの枯死原因は、直接的には「ならたけもどき病」と考えられるとのことである。

註）「ならたけもどき病」は、ナラタケモドキ（キシメジ科ナラタケ属のきのこで病原となるそうです）の感染によって起こる根株腐朽病害である。罹病木は成長速度の低下や葉の変色などの病徴を示し、最終的には枯死に至る。

ナラタケモドキ

ナラタケ

ナラタケモドキは、森や林の朽木や古い切り株などに生えますが、身近な草地などでも埋もれた朽木などに生えることも多い比較的良く見かけるキノコです。
ナラタケに似ていますがナラタケモドキは柄にツバがありません。
両者ともに、枯れ木を分解する木材腐朽菌の一種で、枯れ木ばかりではなく、生きた樹木の根の弱った部分に寄生する樹木の病気の病原菌として知られている。
尚、両方とも食用になるとのことです。

「ならたけもどき病」に罹病した要因

生育環境によるストレスにより、罹病と考えられる。

①舗装による水分供給の不足
②踏圧
③ライトアップによる日長障害
④土壌の貧栄養
⑤生長量に較べて過剰な剪定
　　等の生育環境によるストレス

罹病予防策：ナラタケモドキ菌の遮断と抑制

①植桝周辺に残存するナラタケモドキ菌による罹病を防ぐために、植穴外周に木質炭化物資材による遮断層を設置する。

・ナラタケ属の菌類は、通常アルカリ性の資材を好まない特性を有するため、特定の炭化温度内で焼成された炭化物の施用によって、菌糸侵入を抑制する

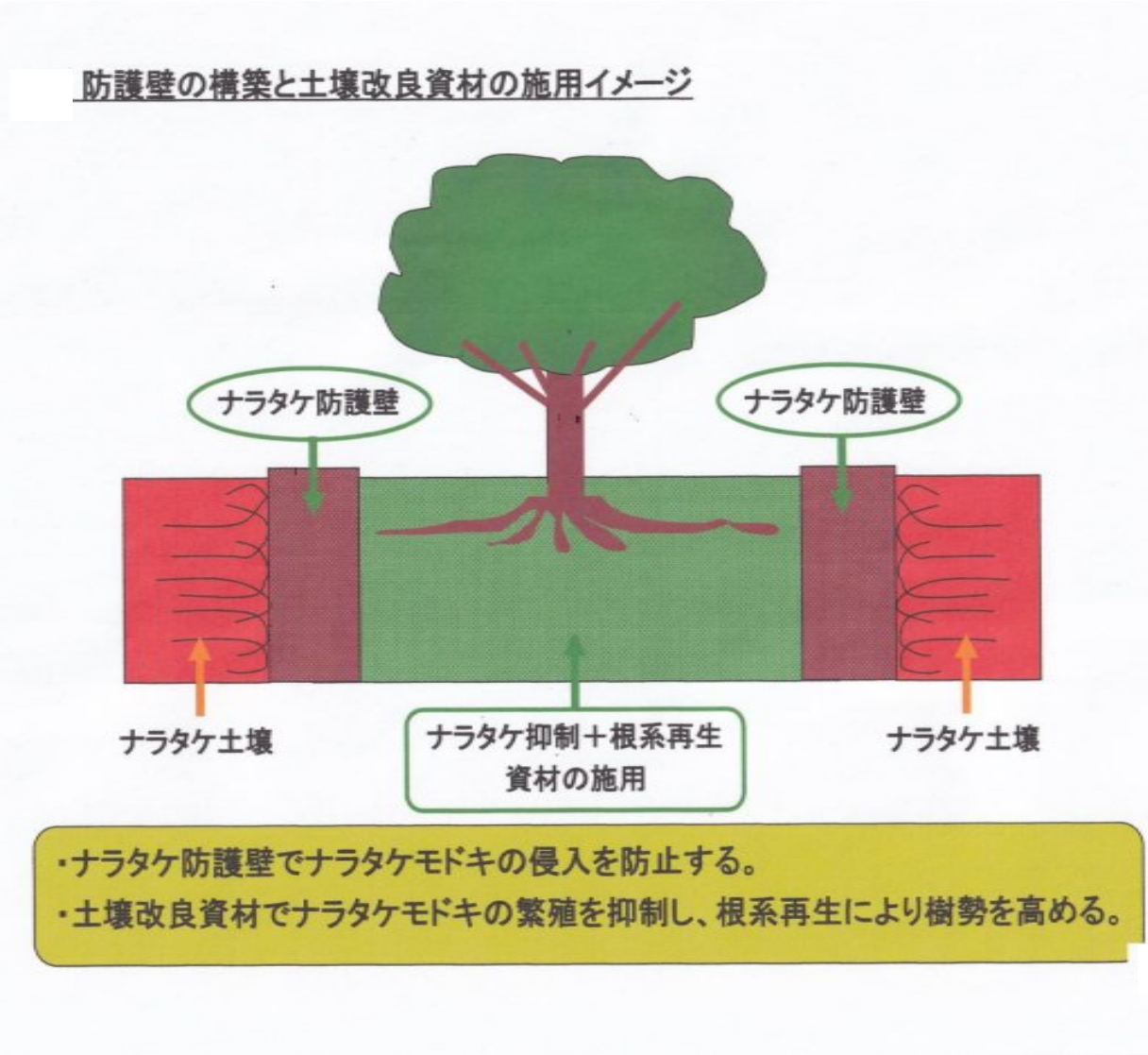
・炭化物は、長期間特性が変わらないという特性を有するため、ナラタケ属菌類の菌糸や根状菌糸束の伸長を継続的に抑制する効果が期待される。

・炭化物は、特性の物質や微生物を吸着する働きを有するため、有用微生物の保持や潅注資材の追加施用が可能である。

②ナラタケ抑制効果と根系再生効果を有する土壌改良資材（菌糸成長を抑制する微生物、木質炭化物等）を施用する

・ナラタケ抑制効果の特徴
　ナラタケ属菌類の菌糸成長を抑制する数種類の微生物を活用する。

・根系再生効果の特徴
　対象樹木の細根の再生を促進する効果を有する。
　対象樹木に適した菌根菌を含有し、再生した細根の菌根形成を促す働きを有する。



罹病予防策を講じて植栽されたシダレヤナギ

２０１４年１１月２４日撮影

罹病予防策を講じて植栽されたシダレヤナギが全て枯死

２０２４年７月２１日撮影

【怨霊鎮魂の神社のこと】

　御霊神社、鏡神社（藤原広嗣の御霊を鎮魂）は「ならなぎ」のコースにありますが、奈良町界隈には、それ以外に崇道天皇社、井上神社、道祖神社（猿田彦神社）があります。

*崇道天皇社

　大同元年（８０６年）に第５１代平城天皇の勅命により、南都の紀寺の地に創建されたお宮で、第５０代桓武天皇の皇太弟である早良親王を鎮めお祀りしています。

　同年、平城天皇は崇道天皇（早良親王）の鎮魂の為に諸国の国分寺に春秋の七日間、金剛般若経を読むよう命じられました。これがお彼岸の発祥で、当社御祭神を起源とする行事です。

　御本殿は、元和９年（１６２３年）に春日若宮社を移建されたもので、現存する春日移しでは最古の建物として大変貴重であることから、国の重要文化財に指定されています。

御本殿

＊井上（いがみ）神社

所在地：奈良県奈良市井上（いのうえ）町

御祭神：井上内親王（聖武帝第一皇女　光仁帝皇后）
　　他戸親王

例祭　９月１５日

由緒

延暦１９年（８００年）、勅命に依り是地に社を造り霊を祀る。宝徳２年（１４５０年）元興寺と興福寺の争いにより類焼。宝徳三年元興寺が現在の薬師堂町に社殿を造り御霊宮と称せり後、民家焼跡に建連なり。町名を井上町とし祠を造り霊を慰め町内の安全を祈願し今日に至る。－境内案内板より－

井上神社

＊道祖神社（猿田彦神社）

　平城天皇の御代に元興寺境内に創祀されたと伝わる。
宝徳２年（１４５０年）、元興寺の大火の際、類焼し、現在の小祠となった。
古来より当社の道祖神、賽神（塞神）・妻神は、開運の神として近在の信仰を集め、商売繁盛、開運招福、良縁・安産の神として名高い。
境内の陽石（賽神）と呼ばれる立派な石は、勝負の守護神として篤い信仰を集めています。
賽を賽子（サイコロ）との語路合せで、勝負の守護神かな？
今では博打の神様とも呼ばれている。

道祖神社（猿田彦神社）　　陽石

御祭神

猿田彦命・・・・・・天孫・瓊々杵尊（ににぎのみこと）が降臨した際に道案内をした神

市寸島姫命（いちきしまのひめのみこと）・・・アマテラスとスサノオの誓約で生まれた女神で、弁財天としても祀られる

別の由緒

聖武天皇は「道祖王（ふなどおう）を皇太子にせよ」との遺言を残されたが、孝謙天皇と藤原仲麻呂は、道祖王の素行が悪いと讒言し、廃太子にしてしまいます。
これに反発した橘奈良麻呂が謀反を計画しますが発覚、藤原仲麻呂は道祖王を共謀者として殺害してしまいます。
一説には、橘奈良麻呂の乱（７５７年）の時、無実の罪で獄死した道祖王の怨霊を恐れ、祀られたのが始めともいわれています。

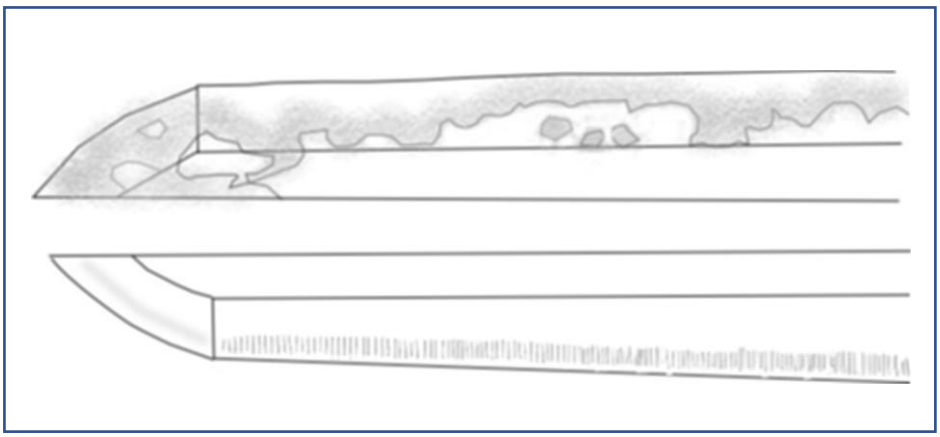
手掻包永（てがいかねなが）

大和の国には、大和五派といわれる千手院（せんじゅいん）、尻懸（しっかけ）、当麻（たいま）、保昌（ほうしょう）、手掻（てがい）の刀工集団がありました。手掻包永（平三郎）は「手掻派」の開祖で、一派は鎌倉時代末期の１２８８年頃から室町時代中期末の１４６０年頃に活躍しました。手掻派は東大寺に従属し、初代包永が「輾磑門（てんがいもん）」門前に居を構えたことからから、「輾磑門（てんがい）」が訛り「手掻（てがい）」と称するようになりました。（書き字は「手掻」・「輾磑」・「天蓋」など）

包永一族は長きにわたりこの地に住んでいたようで、転害門前には、包永町という町名がいまも残っています。

現存する刀剣には三菱グループの静嘉堂文庫所蔵の「太刀　銘　包永」（国宝）や、「銘　児手柏（このてがしわ）」（大正１２年の関東大震災で焼身）などがあります。

この「児手柏」は刃の両面にある波紋が、それぞれ異なる刀だったようで、奈良豆彦神社の境内にあったコノテカシワの木の葉のように表と裏の区別が分かりにくいことからの命名のようです。



「児手柏」の波紋

「児手柏」は戦国時代、細川幽斉が所有し、子に伝わったものを、家康が熱望し銀 500 貫で譲りうけ、その後、家康より水戸家へ渡り、関東大震災で焼身したと伝わっているようです。

野上神社（春日大社末社）：金床石と四郎試し切りの石

　包永の子（別説では孫）、四郎左衛門も刀工となり、日々作刀の修行をしておりましたが、同時に般若寺に足しげく通う、信仰心の熱い方だったようです。般若寺の寺伝によると、四郎左衛門がご本尊の文殊菩薩像に立派な刀を作りたいと心より祈願したところ、文殊様の化身が現れて、四郎と一緒に見事な刀を作り上げたとのこと。この功績で、般若寺より、文珠を名乗ることを許され、その後、文珠四郎と名乗るようになったと伝わっています。
　この文珠四郎にかかわる伝説は、若草山山麓の野上神社にも残っています。野上神社は若草山山焼きの無事を祈願するお社で、「春日の大とんど」の御神火を野上神社のかがり火に移して、無事を祈る儀式を行ってから山に点火されます。御祭神は「草野姫命（かやのひめのみこと）」、草の神様です。
その野上神社のお社の右側にある方形の石が、文珠四郎が刀を作る際に使用した金床石、お社の左奥にある石は、文珠四郎の刀で切りつけた石（石荒神社）といわれています。

石荒神社（いしこうじんじゃ）は春日大社末社、御祭神は火産霊神（ほむすびのかみ）、火の神です。社殿は設けられておらず、二つに割れた巨大な磐座がご神体となっています。また、神社の式年造替の折には、その工事に携わる大工がこの石荒神社でお祓いを受けることでも知られています。

奈良の難読町名（五十音順）

① 阿字万字町（あぜまめちょう）
② 油阪地方町（あぶらさかじかたちょう）
③ 藺生町（いうちょう）
④ 荻町（おおぎちょう）
⑤ 邑地町（おおじちょう）
⑥ 押上町（おしあげちょう）
⑦ 大平尾町（おびらおちょう）
⑧ 肘塚町（かいのづかちょう）
⑨ 鵲町（かささぎちょう）
⑩ 包永（かねなが）　・・・東包永町と西包永町がある。
⑪ 杏町（からももちょう）
⑫ 元林院町（がんりいんちょう）
⑬ 京終（きょうばて）　・・・北京終町と南京終町がある。
⑭ 沓掛町（くつかけちょう）
⑮ 神殿町（こどのちょう）
⑯ 芝突抜町（しばつきぬけちょう）
⑰ 勝南院町（しょうなみちょう）
⑱ 神功（じんぐう）
⑲ 杉ヶ町（するがまち）
⑳ 誓多林町（せたりんちょう）
㉑ 雑司町（ぞうしちょう）
㉒ 高天町（たかまちょう）
㉓ 都祁白石町（つげしらいしちょう）
㉔ 椿井町（つばいちょう）
㉕ 内侍原町（なしはらちょう）
㉖ 二名（にみょう）
㉗ 丹生町（にゅうちょう）
㉘ 忍辱山町（にんにくせんちょう）
㉙ 疋田町（ひきだちょう）
㉚ 白毫寺町（びゃくごうじちょう）
㉛ 不審ヶ辻子町（ふしがづしちょう）
㉜ 生琉里町（ふるさとちょう）
㉝ 大豆山町（まめやまちょう）
㉞ 山陵町（みささぎちょう）
㉟ 三碓町（みつがらすちょう）
㊱ 茗荷町（みょうがちょう）
㊲ 餅飯殿町（もちいどのちょう）
㊳ 鹿野園町（ろくやおんちょう）

奈良の歴史的な由来のある難読町

① 阿字万字町（あぜまめちょう）
弘法大師が阿字万字と書いた秘符（ひふ・神仏の加護がこもり、災厄を除き去るという札）を町に収めたことから名付けられました。
「阿字は一切言語の根源にして衆字の母なり。凡そ最初に口を聞く音、皆、阿の声あり。故に衆声の母となす。内外の諸教、皆この字より出生す。」と弘法大師は教えている。阿の梵字を万字書くと悟りが開けるともいわれる。

② 肘塚町（かいのづかちょう）
高僧玄昉が、九州の太宰府に流された時、政敵であった藤原広嗣の怨霊に体をバラバラにされて空中に舞い上げられ、腕が空から降ってきたとの伝承地で、「肘塚」（かいなづか⇒かいのづか）が築かれたそうです。
ちなみに、眉と目が落ちたのが大豆山町（まめやまちょう）の眉目塚（崇徳寺境内）、頭が落ちたのが高畑町の頭塔、胴が落ちたのが東大寺に隣接（西側）する水門町の胴塚弁財天だとのことです。

③ 鵲町（かささぎちょう）
元興寺禅定院の坊舎「南鵲院」があった場所ということから町名になった。
ちなみに、元興寺に謂れのある町名は「元林院町」、「今御門町」、「東寺林町」、「中院町」、「元興寺町」、「花園町」等々、沢山あります。

④ 包永（かねなが）・・・東包永町と西包永町がある。
鎌倉時代から大和の国には、大和五派といわれる刀工集団がありました。
その一派の手掻派は鎌倉時代後期、東大寺の転害門付近に初代包永（平三郎）が住んでいたことが由来になっています。
「菊一文珠四郎包永（きくいちもんじゅしろうかねなが）」はこの流れ。

⑤ 京終（きょうばて）・・・北京終町と南京終町がある。
平城京の人家がこのあたりで終わっていたので、平城京の終わりということで名付けられました。

⑥ 雑司町（ぞうしちょう）
東大寺の灯明や仏供米、薪出納、法会仏事など雑多な用事をする人々が住んでいたので名付けられました。

⑦ 内侍原町（なしはらちょう）
梨が茂っていたので梨子原といわれ、その後、春日祭のときに内侍の宿舎があったから内侍原と呼ばれるようになりました。

⑧ 不審ヶ辻子町（ふしがづしちょう）
元興寺の僧（怪力の法師・道場）が元興寺に現れた鬼と戦い、逃げる鬼を追いかけ、鬼隠山（きおんざん）の辺りで見失った不審な辻子（小路）ということから名付けられました。

⑨ 山陵町（みささぎちょう）
神功皇后陵や成務天皇陵などの古墳の多いところで、昔は陵のことを山と表現したのでこの名がついたと思われます。

⑩ 三碓町（みつがらすちょう）
古代、この場所には小野妹子（６０７年、聖徳太子の命で遣隋使）の子孫の家があり、３個の穴の開いた石碓（これをカラウスと呼んでいた）で米をついていました。鷹狩に来られた聖武天皇（７０１～７５６年）がこの光景を見られ、この土地を三碓（みつがらす）と名付けられました。